

Summary, 2/7/2024

日時：2024（令和6）年2月7日

「ノダ文研究の現在地 ―研究の進展と今後の方向性について―」

発表者：幸松英恵（東京外国語大学大学院日本学研究院准教授）

発表要旨：

（いわゆる）ノダ文については、先行談話や発話場の状況の中に所与としての事態が提示されており、その事態がなぜ起こったのか、その事態が何を意味するのか等を明らかにする文として現れるのが典型であり、「事情説明」とでも言うべきものであるといわれる。これが以下に挙げる(1)の用法であるが、ノダにはそれ以外にも(2)から(5)のような様々な用法がある。

- (1) すみません、この先通れません。（どうして？と聞かれて）先ほど、事故があったんです。
- (2) （人が集まっているのを見て）おや、事故でもあったんだな。
- (3) （人が集まっているのを見て）え、こんなところにも人が集まるんだ。
- (4) 実は、昨日、ここでも事故があったんです。
- (5) 早く来るんだ！

ノダの様々な用法については既に多くの先行研究で明らかにされている一方で、このように用法が分岐した理由や用法間の関係については異なる見方が提起され、定見が成立していない状態である。

本発表では、(1)の典型的な用法を「知識のノダ」、(2)を「推論のノダ」、(3)を「発見のノダ」、(4)を「披瀝のノダ」、(5)を「命令のノダ」と呼び、それぞれの用法が、ノダが発生した近世期の江戸語資料に見られるのかどうかを確認した結果について報告した。

調査の結果、近世期江戸語の資料からは「ノダ。」という言い切りの形で出てくるのは(1)の用法であり、それ以外の用法は終助詞と組み合わせられた形でのみ見られた。このことから、(2)から(5)の用法はそれぞれの終助詞の機能に寄りかかっており、後にそれがノダ自体に焼きつけられた結果、現在では終助詞を伴わない「ノダ。」という形でも表せるようになったのではないかと考えられる。さらに(4)の披瀝のノダの場合、近世期江戸語資料では終助詞サを含むノサ文にこの用法が見られた。現在の披瀝のノダがもともとノサ由来であり、準体助詞文から発生したものではなかったのであれば、現在のノダ文の用法の根拠を名詞文に求めることができない可能性があることも指摘した。

また、研究の方向性として文学との学際的な研究、韓国語や中国語との対照研究、日本語教育への応用についても簡単に紹介した。